

心木木だより

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——

vol.48
2024 春号



すずき出版発行「心のうたかんだあ」(平成3年版)より 詩／坂村真民「愛」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.18

辛島家と久代の誕生

「この人」(真民66歳)

(前略)

上の四人が男ばかりだったため
初めての女の子の誕生を

父も母もきょうだいたちも

みな心から喜んだ

祝福されて生まれてきた子ゆえ

素直にすくすくと育っていった

(中略)

しかしすべてが幸せにゆくとはかぎらず

父逝き母逝き

幼くして両親を失ってしまった

しかし天成の美質は変わらぬ

彼女は明るくおらかな乙女となった

(後略)

詩の題名である「この人」とは、もちろん真民の妻・久代のことです。久代の58回目の誕生日1月19日に、貧しい時も苦しい時もただ黙ってついてきてくれた妻に感謝して綴った長い詩の一部を



父・徳蔵の肖像画

紹介しました。掲載の写真は、久代の実家全景と父親・辛島徳蔵の肖像画です。顔の鬚をとると前回紹介の久代の写真にそっくりになると思いませんか。

さて、久代には資料として残るものは皆無に近いのですが、少しでも真民が言う天成の美質を生むことになった辛島家を紐解いてみたいと思います。

熊本県玉名郡月瀬村大字青木で、久代の父・徳蔵は辛島家の長男として明治9年に生まれました。この時代は徴兵制度がありましたので、長男を戦争に送らなくても済むよう、両親は徳蔵を北海道に移住させました。その地で大江リヨ(明治17年生)を見初め、二人は結婚します。大



辛島家の全景写真

提供:久代の長兄・一郎の長男・一治の妻・辛島光子

江家は、北海道十勝国中川郡豊頃村で呉服屋を営んでいました。二人の間に長男一郎が生まれ、徳蔵は九州に帰郷します。親子三人が人力車に乗って村入りし、青木村は騒ぎになったとか。続いて、二男、三男、長女、四男、二女・久代が誕生します。ここで皆さんは、アラツと気付かれることでしょうか。掲載の詩と違いますね。長女とある人は幼くして亡くなったと思われませんが、真民と娘達は、久代は一人娘と思い込んでいたのです。おらからで優しい性格は、皆に愛され大事に育てられた故だと。実際、静かで声を荒げることもなく、人の話に耳を傾け、自分を主張することのない人でした。「赤飯」(坂村真民全詩集第五巻)という詩でそれが領けます。要約すると、母・久代

表紙の詩



愛には
意味づけなど
不必要だ
何でもない愛が
本当の愛なのだ
水が流れてゆくような
風が薫ってゆくような
そういう愛を
求めてゆこう

この詩は、真民が70歳の時の詩です。

「表紙の絵」には、前文が抜けているので分かりにくいと思いますが、全文を読んでもらうと真民が求める「愛」が少し分かるのではないのでしょうか。

昭和56年4月(真民72歳)に初めて日本に来られた、裸足にサンダル姿のマザー・テレサをテレビで見た真民は、その日からマザー・テレサの信奉者となり、その「愛」を讃え続けました。

「愛の人マザー・テレサに捧げる讃歌」
マザー・テレサ写真展に寄せて
そのまなざしは
真如の月のごとく
その愛の広さ深さは
インドの海のごとく
その愛の光は
明けの明星のごとく
その愛の力は
ヒマラヤの山なみのごとく
すべては愛より出でて愛にかえる
マザー・テレサの偉大な愛よ

この詩は、真民が83歳の時に開催された「マザー・テレサ写真展」に寄せて書かれたものです。

真民が敬仰した「愛の人」マザー・テレサの「愛」は、「無償の愛」、「無条件の愛」であり、真民が求めた「本当の愛」を実践された人だったと思います。

が三人の子それぞれにセーターを編んでやったことに、父・真民が「大変だね」と言う場面です。次のように続くのです。「大変です」という妻ではない、ただ微笑しているだけ」と。

話を戻します。辛島久代は大正6年生まれですが、父・徳蔵は大正11年に、母・リヨは大正13年に相次いで亡くなります。さぞ悲しかったでしょうに、その話を久代の口から聞いたことはありません。ただ幼いころの思い出語りとして聞いたのは、家の中に大きな酒樽が置いてあったこと、廊下を走ると「寝ているお父さんの頭に響くから」と言われたことくらいでしょうか。

両親の死後、上の学校を出て間もなかった長兄二郎が後を継ぎ、ずっと久代の面倒を見てくれました。この一郎さんの優しさがわかる話を紹介しましょう。実は、久代が77歳のとき突然も膜下出血で倒れ命は取り留めたものの、一部を残して殆ど記憶を失います。可愛い幼子のようになつた久代が語った話です。月瀬小学校卒業後、高瀬高等女学校に進み、かなりの距離を歩いて通うことになりました。お針が得意な久代の裁縫箱は大きく重たく、その頃自転車通勤していた二郎さんが裁縫箱一式を荷台に乗せて、女学校に届けてくれていたと言うのです。久代

が学校に着くと、友達が窓から顔を出して「荷物が先に着いちよるばい」とからかい半分に教えてくれたそう…。嬉しそうに楽しそうに幾度も話してくれました。そして、女学校の専科を卒業した年に、真民との結婚話が進むのです。今号は、とりとめもなく綴ってしまいました。伝わるところがあつたでしょうか。次回は久代の母のルーツに少しだけふれて、場所を朝鮮に移します。

最後に、真民にとっての妻・久代は「このひと」と、もう一つ「白い花」に象徴されています。

文／西澤真美子

「真民さんの生き方」展を考える

「坂村真民の生き方」については、これまで何回か切り口を変えて企画展・特別展を開催してきましたが、今回は、「厳しく自分を戒め、今日より明日へ向かって生きる」という生き方の、「明日に向かって前向きに生きる」という所に焦点を当てて企画しました。

サブタイトルとして掲げた言葉「できるだけうれしいうたをつくろう」は、「うた」という詩の言葉ですが、前向きに生きる真民さんの思いを一番

坂村真民記念館開館12周年記念特別展

真民さんの生き方

～できるだけうれしいうたをつくろう～

2024年3月2日(土)～6月30日(日)

●開館時間/9時～17時(入館は16時30分まで)月曜日休館(祝日の場合は翌日)

主催 坂部町、坂部町教育委員会、愛媛新聞社、南海放送
 後援 愛媛県、愛媛県教育委員会、NHK松山放送局、テレビ愛媛、
 若しよし、愛媛朝日テレビ、愛媛県入道、FM愛媛

2024年3月2日(土)～6月30日(日) 月曜日休館(祝日の場合は翌日)

2024年7月6日(土)～10月20日(日) 予定

観覧料	前売券	当日
一般	500円	800円
高齢者(70歳以上) 高校生・大学生	400円	600円
小・中学生	300円	400円

【入館券別売】坂村真民記念館、愛媛新聞社、南海放送
 (平日9:30～17:00、土曜9:30～13:00、愛媛
 県美術館ミュージアムスペース11および高松
 館、県内図書館(一部店舗を除く)、コープひろば、
 読文化サービス、パソコンショップ、しごと
 広場(アール)などでお取り扱いしております。お問い合わせ
 先は、愛媛新聞社案内係または坂村真民記念館案内係
 へお問い合わせください。

※15歳以上の団体は団体割引があります。観覧券手帳をお持ちの方お一人1枚を2枚は無料
 で入館できます。観覧券手帳をお示しください。なおお返しの料金が別途お支払いいただけます。

坂村真民記念館
 〒791-0202 愛媛県伊予郡松前町大字 電話:099-8959443
<https://www.shimin-museum.jp/>

良く表している詩だと思っています。

今年も正月早々から、悲しい事故・災害が発生して、なかなか「希望の光」が見えにくい年になりそうです。が、そういう中でも、こつこつと自分の出来ることを実践し、前に向かって生きることを詠った詩を作り続けた「真民さんの生き方」は、皆さんの心に「生きる希望と勇氣」を湧き起こらせてくれるものと思います。

そして、今回の特別展の構成を考えているときに、私がずっと思っていたことは、真民がその「厳しく自分を戒め、そこから明日に向かって生きる」という生き方を生涯続けることができたのは、家族の支えがあったからこそ、ということでした。

真民さんの詩に「捨てず」という詩がありますが、私からすれば、逆に家族から「捨てられず」にいたからこそ、その生き方を続けられたのだと思うのです。

「真民さんの生き方」を根底で支えていたのは、家族の愛であり、特に妻の物心両面の支えがなければ、到底「真民さんの生き方」を貫くことはできなかつたであろうと思うのです。

今回の特別展のポスターの案を考えている時、そのことをしきりに思い、それをどう表現するか、色々考えた末にたどり着いたのが、家族5人が手をつなぎ、前に向かって歩く姿の絵なのです。

そして、この家族の手が、さらに周りの人々の手につながってずっと地球上のすべての人々とながることが、真民のねがいであり、そのためにどう生きるかを考え、そこへ向かって、こつこつと努力してゆくことが、「真民さんの生き方」であつたと思います。

「真民さんの生き方 ～できるだけ、うれしいうたをつくろう～」

開催期間 2024年3月2日(土)～6月30日(日)

坂村真民は、42歳から96歳までの54年間に796冊の「思索ノート」を書き残しています。この「思索ノート」の中で真民は、毎日のように自分を戒め、そして自らを励まし奮い立たせる言葉を書いています。これは、「ノート」を書き始めた40代から晩年の90代まで、変わらず一貫してほぼ毎日の「ノート」に書かれています。

また、坂村真民の詩は、「君たちはどう生きるか」を問う詩ではなく、「私はどう生きるべきか」を問う詩であり、どの詩も「君たちや貴方たちへの詩」ではなく、「自分自身に向けた詩」であり、その中心となるのが「自分を戒め、今日より明日を見つめ、前に向かって進もうとする詩」なのです。

慎ましくささやかな生活の中に小さな幸せを見つけ出し、どんなにつらい、悲しいことに出会っても、それを嘆くことなく、哀しみを受け入れ、それを湛えて、前に向かって生きることが「真民さんの生き方」でした。

一方で、真民さんは、生きることに悩み苦しみが

ら、いつも自分に向かって「この生き方でいいのか」、「まだまだいかん」と自問自答しながら、自分の生き方を摸索し、その答えとして詩を書いてきました。その中には、自分を厳しく戒める詩とともに、その時々にも自分を励まし、前に向かって生きることを詠った詩が書かれているのです。

今回の特別展では、そのような真民さんの、前向きに生きる生き方を詠った詩を集め、来館された皆さんが「少しでも、前向きに生きていこうと思える」展示構成にしています。

さらに、本邦初公開のスペシャル展示として、真民さんが常に身の回りに置き、その生き方を支えていた「真民さんの愛用品」を展示します。

皆さんの心に、「生きる希望と勇気」が沸き起こり、皆さんが「うれしいうたをつくれるよう」になることを願った、そんな真民詩を選び展示していますので、どうぞ記念館にお出かけください。



母の弘法大師座像(左):母たねが大切にしていたものを、母亡き後に真民が譲り受け、母の仏壇に置いて大事にしていたもの。

観音様の絵(中央):杉村春苔先生が、真民の病氣回復を願って描きあげたもの。

菫地蔵(右):朝鮮時代に早逝した菫にそっくりの石彫り地蔵を見つけて購入し、夫婦で大切にお守りしていたもの。

坂村真民記念館 西澤館長による
ミニ講演会のお知らせ

●日時: 3月3日(日) 11時～12時

●場所: 記念館会議室

入場無料:先着40名

自分の花を咲かせよう

元文部科学副大臣 小野晋也

昭和30年愛媛県新居浜市生まれ。平成5年、衆院選初当選以後5期連続当選。経済企画総括政務次官、文部科学副大臣などを歴任。平成21年衆院選不出馬。現在は中央政界から離れ、「在野の経世家」として活動する。



私の心に最も強く響く真民先生の言葉をたった一つだけ紹介しろと言われれば、私は、「自分の花を咲かせよう」という言葉を選ぶだろうと思います。そしてその言葉を、もう四半世紀も前のことになろうかと思いますが、真民先生にご揮毫いただいた、愛媛県四国中央市の新宮という山里にある「志の道」に、石碑として立てさせていただきました。

なぜこの言葉がいいのかといえば、私の信条に強く響き合うものがあるからです。これまでの人生を振り返って、「私が真に敬意をもって仰ぎ憧れてきた人物とはいかなる人であったのだろうか」と考えてみるときに、それは決して、世俗的に高く評価されている人ではなかったように思います。つまり、多くのお金を持っている人でもなければ、高い地位に就いている人でもありませんでした。また、マスメディアによく登場して、人気を博している人でもありませんでした。こういう方々は、確かに優れた資質を備えていたればこそ、世の中から高く評価される成功を収めた人だと評価できると思うのですが、私が胸に抱いている物差しには合致しない人たちでした。

それならば、「どんな人が、尊敬に値する人なのだ？」と問われれば、「いかなる困難に出会ったとしても、善意を持って、自らの信念のもとに、犠牲を厭うことなく、人生を貫いて闘い続けた人だ」とお答えしたいと思うのです。そのような生き方は、決して楽な生き方ではないと思います。自らの信念を貫こうとすれば、どうしても周りとの軋轢を避けられないでしょう。様々なものを数多く背負い続けねばならないでしょう。

しかしそれでも、自らが信ずることをどこまでも貫かなければ、自分自身の生命力に根ざした「自分の花を咲かせる」ことはできないのだろうと思うのです。そして、自分の精神を後世に伝えるためには、どのようなことであれ、やり抜くことが大事だと思います。それを人生の最期の時まで貫き通せば、人の心の中に、その花の姿や香りを残していくことが出来るように思うのです。

その花には、大きいだとか、小さいだとかいった、他のものと比較して優劣を競うような発想は似合わないと思います。他の人がどう見るかということではなく、自分が咲かせたいと思

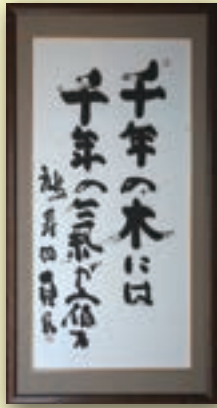
う花の姿を胸に抱いて、爽やかに生きるということこそが、大切なのではないのでしょうか。真民先生の生き様とは、そのようなものであったに違いないと、私は思います。

今の時代は、あまりにも種々雑多な膨大な量の情報が押し寄せてきています。そんな中で自分自身を見失ってしまいう人も多くおられると思いますが、そんなときには、この真民先生の「自分の花を咲かせよう」という、深い祈りのこもった、力強い言葉を思い返していただきたいものだと思うのです。



四国中央市新宮「志の道」にある真民石碑

坂村真民記念館を応援しています



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム
To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

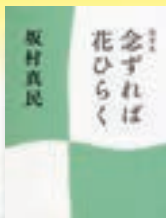
詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!

念ずれば花ひらく



10万部突破の
超ロングセラー!

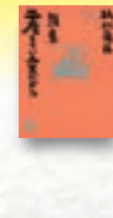
いま届けたい、生き方の道しるべ

詩集
念ずれば花ひらく



詩集●定価=本体各1000円+税

詩集
宇宙のまなざし



詩集
二度とない人生だから

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

広告募集中

「タンポポだより」に広告を出してくださる
企業・団体等を募集しています。

[広告料]

1枠(タテ60mm×ヨコ170mm) …… 年間10万円

- 年間発行部数/2,000部(年4回発行)
- 送付先/友の会会員、県内社会教育施設、県内旅行・観光業者等その他、記念館の来館者に配布

「タンポポだより」の発行費用は、この広告料で賄っています。それによって、友の会の会員の皆様からの会費は、タンポポだよりの送付料や記念館の活動経費に充てることが出来ます。記念館の活動を充実させるためにも、広告料収入が必要不可欠です。どうぞ、このような趣旨をご理解くださり、広告掲載へのご協力をお願いします。

























月刊誌「致知」
有名無名やジャンルを問わず、
各界各分野で一道を
切り開いてこられた方々の
貴重な体験談を
毎号紹介しています。

書店では手に入らないながらも、
口コミで増え続け、
11万人に定期購読されている
日本で唯一の
人間学を学ぶ月刊誌です

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9
TEL.03 (3796) 2111 (平日9:00~17:30) FAX.03 (3796) 2108

致知 検索 

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください [坂村真民記念館 友の会](#)

〈編集後記〉

真民が住んでいたタンポポ堂に一番に春を告げる花は“こぶし”でした。そして“おがたまのき”も花を開きます。香りが漂ってくるようですね。しばらくすると、“はくもくれん”がまるで鳥が並んで止まっているように咲き始めます。白い花が大好きな父でした。(真美子)

タンポポだより vol.48 春号

令和6年3月1日発行
発行元／坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内
TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)
休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日
入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、
小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり